

令和 8 年度

経済福祉常任委員会会議録

令和 8 年 8 月 2 4 日

福 島 町 議 会

会議録の作成にあたっては、誤りのないよう留意しておりますが、時間の関係上、原稿校正は初校よりできなく、誤字、脱字がありましたら、深くお詫び申し上げます。

まことに恐れ入りますが、ご了承のうえご判読いただきたくお願いいたします。

福島町議会議長 溝 部 幸 基

令和8年度

経 済 福 祉 常 任 委 員 会

令和8年8月24日（月曜日）第1号

◎案件

- (1) 所管事務調査等について
 - ・調査事件2 アワビ陸上養殖事業の進捗状況について
- (2) 定例会9月会議後の休会中の所管事務調査について
- (3) 報告事項について
 - ①福島町家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準を定める条例の一部を改正する条例
 - ②福島町乳児等通園支援事業の設備及び運営に関する基準を定める条例の一部を改正する条例
 - ③福島町特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準を定める条例の一部を改正する条例

◎出席委員（5名）

委 員 長	佐 藤 孝 男	副 委 員 長	小 鹿 昭 義
委 員	平 沼 昌 平	委 員	平 野 隆 雄
委 員	溝 部 幸 基		

◎欠席委員（0名）

◎委員外議員（4名）

議 員	藤 山 大	議 員	杉 村 志 朗
議 員	木 村 隆	議 員	熊 野 茂 夫

◎出席説明員

町 長	鳴 海 清 春	副 町 長	小 鹿 一 彦
産 業 課 長	福 原 貴 之	産 業 課 長 補 佐	中 村 伸 也
産 業 課 水 産 係 長	尾 崎 司 宙		

◎職務のため議場に出席した議会事務局職員

議 会 事 務 局 長	鍋 谷 浩 行	議 会 事 務 局 議 事 係 長	山 下 貴 義
議 会 事 務 局 議 事 係	角 谷 里 紗		

○委員長（佐藤孝男）

おはようございます。

ただいまから経済福祉常任委員会を開会いたします。

本日の調査事件は、調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」であり、資料等は皆様のお手元に配布のとおりでございますので、ご了承願います。

申し出により、町長の挨拶を行います。

鳴海清春町長。

○町長（鳴海清春）

改めまして、おはようございます。

経済福祉常任委員会の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

委員の皆様には経済福祉常任委員会にご出席をいただき、誠にありがとうございます。

本日の調査事件は、「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」となっております。

調査事件2の「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」ですが、当町のアワビ陸上養殖は平成28年に道から派遣された水産アドバイザーの山内氏と地元事業者が美山地区で試験事業として行ったのが始まりで、町ではその試験事業を受け、平成30年に地方創生拠点整備交付金を活用しアワビ陸上養殖施設を建設し、本格的なアワビ陸上養殖事業を開始し現在に至っております。

委員会資料にもありますように、現在開始から8年余りを経過し、北海道栽培漁業振興公社の種苗生産にトラブルが発生するなど大変厳しい状況にありますが、函館五島軒による「アワビカレー」の販売など新たな特産品の開発などにつながるとともに、地元での販売や飲食店での新たな特産品としてアワビカレーの提供など一定の経済効果に繋がったものと感じております。

そのようななか、新たな取り組みとして岩手県の北日本水産株式会社とのご縁をいただき、当社が持っているノウハウを最大限に活かし、当町での新たな陸上養殖生産体制を構築していただき、企業誘致を視野に取り組みを加速してまいりたいと考えておりますので、ご理解とご支援をお願いいたします。

このあと担当者から資料の内容を詳しく説明をいたしますので、よろしくご審議くださるようお願いいたします。

以上で、経済福祉常任委員会の開催にあたっての挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いをいたします。

○委員長（佐藤孝男）

町長の挨拶を終わります。

これより、調査事件に入りますが、まず調査の方法について説明を致します。

始めに、調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」の資料の説明を受け、「不明な点や疑問な点」についての説明に対する質疑を行います。

質疑が終了した段階で、調査内容について説明員と意見交換を行います。

意見交換が終了後、説明員には退席をしていただき、休憩をとり、休憩中に調査事件ごとに論点・争点の整理を行い、概ねその整理した事項に基づき、委員間の意見交換や討議を行います。その後、最終的な委員会意見のまとめをし、議長に提出することとなります。

以上、調査の方法等を説明しましたが、これにご異議ございませんか。

（「異議なし」という声あり）

○委員長（佐藤孝男）

ご異議なしと認め、そのように進めてまいります。

それでは、調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」の調査に入りますが、あらかじめ調査内容について簡単にご説明いたします。

町が進めるアワビ陸上養殖事業は、事業がスタートしてから10年目を迎えますが、ここ数年は種苗購入先での病気の発生や自然災害などによりアワビ種苗の安定的な供給ができない状況から、販売サイズの在庫不足が続くなど、アワビ陸上養殖事業の収支は依然として厳しい状況にあります。

そのような中で、町では、課題となっている陸上アワビの生産性の向上と事業の効率化を図るため、

令和7年度より北日本水産のノウハウを最大限活用した大量生産の可能性等について調査しているところであり、この度、養殖事業の進捗状況と今後の方向性について資料が示されましたので、本日はその内容を調査するものです。

それでは、調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」を議題といたします。

説明員から資料の説明を求めます。

福原貴之産業課長。

○産業課長（福原貴之）

資料の3ページをお願いします。

調査事件2 アワビ陸上養殖事業の進捗状況について。

1、アワビ陸上養殖事業の現状について。

（1）現在のアワビ生産状況について。

現在のアワビ生産状況は、試験飼育の種苗を除き、令和8年7月28日現在の飼育総数が75,080個となっております。

施設内の生育状況については、令和4年度及び令和6年度に北海道栽培漁業振興公社から購入した種苗が納品後のへい死が多く、育成数が大きく減少している状況にあります。

また、令和6年度に北日本水産株式会社から購入した種苗については、7月の種苗納品であったため、夏場の輸送ストレスに加え、岩手県の海洋環境の変化により種苗が疲弊し、多くのへい死が発生しております。

なお、へい死した見合い分の補填については、山林火災の被害状況が復旧し、種苗生産が安定した段階で納品される予定となっております。

表は近年の種苗購入及び在庫の状況となります。

施設内では令和4年度産種苗から令和7年度産種苗を飼育しており、栽培公社産は計17万個の購入に対し、へい死と販売数を差引、現在の在庫数は74,603個となっております。なお、令和5年度の購入はございません。

また、北日本水産産は5万個購入し、輸送時のストレスなどで大量にへい死した以外は順調に成長し、現在の在庫は477個でございます。

（2）アワビ種苗の購入について。

アワビ陸上養殖の種苗については、令和5年度に栽培公社で発生した筋萎縮症により種苗購入が困難となったことを受け、栽培公社からの斡旋を受け、令和6年度からは北日本水産からも種苗を購入しております。

北日本水産では、令和7年2月26日に岩手県大船渡市で発生した林野火災により甚大な被害を受けましたが、現在はアワビ種苗の生産が順調に回復しており、当町への令和8年産種苗の供給数は現時点で未定であるものの、秋頃には当町が希望する種苗購入に係る売買契約を締結できる見込みとなっております。

なお、栽培公社産の種苗については、北海道が種苗生産を担う熊石センターに紫外線殺菌装置を導入したことにより、令和7年度に購入した種苗は成長が順調で、へい死率も低く推移しており、販売サイズ到着まで高い歩留まりでの成育を期待しているものでございます。

今後の種苗確保については、栽培公社及び北日本水産からの購入を計画しており、令和8年度は栽培公社から25ミリの種苗2万個の購入契約により、12月に納品予定であります。今後は栽培公社と北日本水産の種苗を併用しながら安定した種苗確保に努めてまいります。

（3）アワビの販売状況について。

令和7年度の販売実績は、令和6年度に北日本水産から購入した種苗の販売が順調に進んだ一方、令和5年度の種苗確保ができなかった影響もあり、17,205個の販売にとどまっております。

近年の販売状況は、種苗の確保が不安定な状況が続いており、これらの要因が相まって販売サイズの在庫不足が生じております。この結果、令和7年度の販売額は対前年を下回る結果となっております。

なお、町民向け直売会は、令和7年度で4回開催し、5,566個、販売金額が135万2,246円の実績となっております。

令和7年度においては、合計で17,205個、販売額350万8,671円となっており、令和6年度の実績を下回るものの令和7年度は前年度より成長が良く、1個当たりの平均単価は上昇してござい

す。

2、過去3カ年の決算状況について。

令和7年度の決算状況について説明いたします。

歳入の財産収入では、活販売（一般）から下段のふるさと納税までの販売で350万9千円の実績となりました。

次に、歳出については主な増減を説明いたします。

需用費の消耗品については、主な内容は餌料購入費でございます。また、アワビ稚仔購入費は栽培公社から20ミリ種苗を2万個、30ミリ種苗を4万5千個購入しております。

次に、人件費ですが、会計年度任用職員のフルタイム職員1名、パート職員2名に係るものであり、人件費に加え共済費を加えた給与費総額の数値となっております。

令和7年度の収支については、収入350万9千円に対し、支出2,387万2千円で、収支はマイナス2,036万3千円となりました。

3、アワビ陸上養殖生育等調査委託について。

平成29年度から開始したアワビ陸上養殖事業は、当町独自の生産方式により生産を行ってきましたが、生産性及び効率の向上を課題として、令和7年度に北日本水産のノウハウを最大限に活用した大量生産の可能性等について調査を行っております。

水質サンプル調査では、アワビ陸上養殖施設の隣接地を掘削し、地下浸透海水の可能性を調査しております。

また、既存の養殖施設には北日本水産が生産に使用している水槽を利用し、試験飼育用の種苗4,000個を搬入しており、従来の多段式の飼育方式と北日本水産方式の5メートル水槽を同一種苗で比較する試験を行い、成長の検証を行っております。

（1）水質サンプル調査。

ボーリング調査の結果、礫まじりのシルトから5メートル地点で泥岩の堆積が確認され、海水の浸透は非常に少ない結果となりました。

ボーリング業者からは、適切な地点を選定すれば取水は可能であるとの見解が示されており、今年度も引き続き調査を継続することとしております。

（2）既存陸上養殖施設での試験飼育。

本試験では、既存の多段式と北日本水産で採用するプール式によるかけ流し式とを比較し、アワビの成長効率の調査を行っております。

調査の結果、殻長・体重ともにプール式での成長が優れており、殻長のばらつきも少なく均一に成長していることが確認され、重量についてもプール式の方が高い成長結果を示しております。

表は、プール式と多段式を平均殻長、重量、肥満度の調査結果となります。

結果では、殻長及び重量はプール式の成長が良い結果となりましたが、肥満度については多段式の方が若干ですが高い数値を示しております。なお、肥満度は0.14を上回る結果が得られており、肥育条件としては問題ないと判断されてございます。

（3）アワビ生産事業収支について。

上記の試験等結果から既存の陸上養殖施設において、新たな生産方式が可能となった場合、販売サイズ70ミリで年間約73,000個の販売が見込まれる試算が示されております。

一方、支出面では、人件費を含む生産コストの抑制が重要であり、人件費や餌料費の削減が必要であるとの結果が示されております。

人件費については、多段式からプール式へ移行することで、清掃等の労働負担が軽減され、餌料費については、間引き昆布などの未利用資源の活用によりコストダウンが可能と報告されております。

このことにより、生産方式を見直しすることで、3年目から単年度で黒字化が見込まれるとの試算が示されております。

ただし、この試算は多段式を全て廃止し、プール式での飼育に統一することが条件とされております。

表の【福島町アワビ生産事業収支計画】は、北日本水産が試算したものであり、全てプール式とした場合であり、3年目から全て北日本水産の種苗の販売となるものとなります。

支出の種苗購入は岩手県から納品される積算であり、後年度において北日本水産に施設を移管した場合

は、種苗購入費は自前種苗となるため大幅に抑制されることが期待されます。

また、人件費については、これまでの多段式から清掃・管理作業が大幅に削減されることから、大幅な人件費の削減を可能としております。

なお、収支計画書は北日本水産が当町の施設の状況を勘案して試算したものでありますが、3年目から単年度黒字となる見込みをしております。

4、今後の方向性について。

これまでのアワビ陸上養殖では、アワビカレーなどの新たな特産品が生まれるなど、また、町民向け販売や町内飲食店での提供を通じて、福島町アワビの認知度が町内外の方々に広まっております。しかし、間接的な効果は一定程度あるものの、アワビ陸上養殖事業の収支は依然として厳しい状況にあり、改善が課題となっております。

このような中、北日本水産のノウハウによりアワビ陸上養殖における新たな生産方式の確立や給餌方法の見直しを行い、生育期間の短縮に成功しており、また、令和8年度からは種苗の安定確保が見込まれることから、施設の生産能力を最大限活用した生産・販売体制の構築を進めてまいります。

これまでの生産方式の見直しを検討するために実施した多段式とプール式の比較試験では、プール式がより効果的であることを示す数値が得られたことから、新たな陸上養殖体制の構築に向け、北日本水産と連携しアワビ増産に向けた取組みを進め、事業の持続可能性と拡張性の向上を図ってまいります。

今年度も北海道の地域づくり総合交付金を活用し、北日本水産へ「アワビ陸上養殖生産等調査事業」を引き続き委託しており、地下浸透海水の取水調査やプール式水槽を増設した成長試験のほか、新たな販路開拓や出荷体制の検討も併せて実施する内容となっております。

なお、アワビ陸上養殖事業については、既存の多段式水槽は経年劣化により改修が必要となっており、これまでの試験結果等を踏まえ、プール式水槽への全面的な移行を令和9年度から3ヵ年計画で進めるとともに、同時並行で北日本水産の協力をいただきながら今後5年を目途に施設運営を同社へ移行する方策も協議してまいります。

以上、ご審議のほどよろしくお願い申し上げます。

○委員長（佐藤孝男）

内容の説明が終わりましたので、質疑を行います。

冒頭申し上げましたように、質疑は「不明な点や疑問な点」の質疑といたします。説明員との意見交換は後ほど別に時間を設けておりますので、どうぞご協力をお願いいたします。

それでは、質疑に入ります。

小鹿委員。

○委員（小鹿昭義）

栽培公社の稚仔のへい死の原因って分かりますか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

状態にもよるんですけど、令和4年までの部分の種苗については、やっぱり元気がないという部分。前後に病気というか筋萎縮症も発生しておりますし、種苗自体に元気がなかった。これは親が原因なのか何が原因となるかという部分は試験研究機関の方でも解明はされていませんが、我々福島町にきた種苗がやっぱり元気がなかったという部分が種苗のへい死に繋がっているものと考えております。

また、ほかの町でも公社さんの種苗その当時の種苗はやっぱり元気がないという種苗は、横の繋がりで他の町とも確認しながら伺っております。

○委員長（佐藤孝男）

小鹿委員。

○委員（小鹿昭義）

それじゃあ、今後はもう治るということでよろしいのでしょうか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

資料にも記載させてもらいましたが、令和7年度産の栽培公社の種苗が思ったより成長が良い、公社も自信を持って納入しているという状況を公社からも聞いております。

これが背景として紫外線殺菌装置を入れたから成長が良くなったのか、そうでないのかも飼育の管理から変えたのが良い結果に結んだかという部分は私達そこまでは伺っておりませんが、令和7年度産の種苗については私ども以外にも他の町でも元気な種苗だということで確認しております。

○委員長（佐藤孝男）

小鹿委員。

○委員（小鹿昭義）

仕入数に対して稚仔のへい死率の許容範囲はどのくらいと考えていますか。それを教えてください。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

本来であれば10パーセント程度で推移するのが一番理想だなという部分はしています。ただ、公社の令和4年度産とかを見ると50パーセントを超える大きなへい死になっています。それはやっぱり種苗の元気差という部分、活きのいい種苗じゃないという部分が背景にもあった部分が想像されます。

令和7年度を見ていただくと1万はへい死はしていますが、ある程度納得いける数字になっているのかなと思っています。ただ、以前の部分についてはやっぱり種苗自体が元気がないのと、やっぱり栽培公社でも放流用の種苗を優先的に各漁協とか町に提供するもので、最後私達福島町のような養殖事業に種苗が回ってくるという状況もあるもので、やっぱり採卵回数が遅くなれば遅くなるほど種苗の元気がなくなるもので、そういう部分も背景にあるのかなという部分で思っています。

○委員長（佐藤孝男）

小鹿委員。

○委員（小鹿昭義）

令和7年度はへい死率16パーセントです。それで、プール式に移行すると書いてありますけども、これってどのくらいの費用掛かるのでしょうか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

生の数字でいくと4千万程度という話が言われています。それは水槽もしっかり用意して新たにつくるという部分から岩手県から搬入するという部分になります。

それが、今は当町においてもユニセンターの水槽とかも有効利用できるものがありますので、そういったものを再利用して少しでも経費を抑えた中で入れ替えたいなという部分は考えてはいますが、その事業の内容については今後また北日本水産さんと今そういう生育試験とかもやっていますので、今後そういった協議になってくるのかなと思いますけど、若干コストは抑えないと事業が展開していかないんだよという部分は私達も提案させてもらっています。

○委員長（佐藤孝男）

小鹿委員。

○委員（小鹿昭義）

最後になりますけど、5年後に北日本さんに移行すると書いてありますが、これってかなり話進んでいるのでしょうか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

これ自体は町の強い思いでありまして、北日本水産の社長、専務とかも事業委託しているものですから頻繁に福島町に訪れていただいています。

そのなかで、今の既存の陸上養殖は北日本さんに担っていただきたいという部分は私の方もそうですし町長からも社長の方に説明しています。

ただ、北日本さんの考え方からすると今の多段式がある以上は、やっぱり自分達しっかり管理しきれな

いもので、そのプール方式に全て置き換わった時点で移管するという部分の協議は今進めている状況にあります。

○委員長（佐藤孝男）

いいですか。

次に、平沼委員。

○委員（平沼昌平）

まず、今までの過去3年間決算は大幅な赤字と。それからもう一点、主な原因というのは固定費であり人件費の要因があると思いますね。これは会計年度任用職員等も使っていますからね。

それから、収支自体が不安定な状態できてあったということと、北日本さんの火災もありまして事業がうまくいかなかったという面もありますけども、基本的に福島町は今の質問の中にもありますけども、陸上養殖アワビ自体を大量生産していくのか、ブランド化していくのか、まずそこら辺どういう立ち位置で考えていますか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

大量生産という書き方させてもらったんですけど、しっかり今の既存施設で生産できる数字はしっかり確保したいという部分の意味合いを込めて大量というイメージを書かせてもらいました。

ただ、やっぱり頑張っていっても資料にもありますけど一年間で出せる販売個数が7万3千個となっていますので、大量と言ってもそこが限界なのかなと。そこの今のアワビ施設だけではこの大量生産したにしても採算合うのかという話も出てきます。100何十万の利益くらいでどうなんだという部分も言われるかなとは思いますが、この施設以外にも以前もちょっとお話したことがあるんですけど、北日本さんは岩手県からリスク分散して北海道福島町でも種苗生産をしたいという強い思いがありますので、そこら辺と合わせたなかで勝負するというのが一番なのかなと思っていまして、それにはやっぱり福島町のブランドとしてはしっかり乗っていきたいなとは思っております。

○委員長（佐藤孝男）

平沼委員。

○委員（平沼昌平）

ここで、6ページに先ほど言った7万3千個これを見込まれる試算を出しております。それで事業の収支計画では、ここで人件費と書いてありますけども、その数字も1年目から5年目さまざまな要因で人件費を抑えられるだろうという話になっていますけども、実際には今までのやり方だと半分以上が固定費として人件費出ていますよね。それがこの生産量を上げて、一つ、7万3千個というのは事業が全てうまくいった時のマックスの数字ですか。それとも、何て言うんですか平準的なものの生産の仕方で7万3千個ということなののでしょうか。あらゆるものを考えないで全てうまくいって7万3千個なのか、危険率を入れて、危険率というかそういうのが言葉が適切かどうかは分かりませんが、そういうものを加味して7万3千個なのかそこら辺はつきりしましょうかね。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

種苗の納入というか生産は1年当たり86,250個という計算を立てています。そこで、今7万3千個という数値を出して積算している背景は、やっぱりへい死もあるだろうということがありますので、一応15パーセントをへい死率と見て、その分を控除した7万3千個を生産個数として計算しています。

○委員長（佐藤孝男）

平沼委員。

○委員（平沼昌平）

これは多段式からプール式に変えた段階での話ということですよ。ということは、今はもう多段式から完全に町としてはプール式に変えていきたいというその資料ですよ、これはどっちかというとその書き方はね。このなかで人件費が5年間ずっと同じなんですけど、これでやっていける計算ですか。これだったら大体1人という感じの人件費になってしまうんじゃないですか、どうですか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

今後さまざまなものも掛かるものはあると思うんですけど、今までは毎日多段式のものを清掃してやっていたものが、今プール式になると一週間に1回の水の換えでいいということは北日本さんから言われています。それで、単純に施設の中に56水槽が入ったという過程で計算しています。それを週に1回で2人で作業していただく。これが大体1人180万弱にはなるんですけど、こういう試算で北日本さんは想定しているということです。

我々いま社会保険もつけて会計年度として任用しているんですけど、果たしてここが大幅な乖離しているものですから私の方も北日本の方にも確認したところ、最低限必要な部分はここだと。北日本さんでもこういう方式で人件費出してやっていただいているというそういう試算をもとに北日本さんで作っていた資料となっております。

○委員長（佐藤孝男）

平沼委員。

○委員（平沼昌平）

わかりました。ある程度へい死率15パーセントというのは高いか低いかという私はかなりあまく見積もっているのではないのかなという気はするんです。さまざまな要因を今までのことを考えると、ちょっと今までの経験を踏まえて15パーセントというのはちょっとどうなのかなって気がするんですけども、そこら辺は一番懸念するのは事業が進みだしてからですね。またもこれ、またもこれということで経費が掛かるというのは一番懸念されることで、今までの10年間の例えば経験を活かしてどこまで見るかという、そのものが町独自でも持っていてもいいような気がするんですけども、そのへい死率とか事業の危険率というかそういうのをそこら辺の抑え方の考え方って持っていらっしゃるのかどうなのか。それは先ほどの質問に繋がりますけども。

それで、町の立ち位置としては、あくまでも民間に委託するというような基本的な考え方というものは持っていらっしゃるということで間違いないですね、どうでしょうか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

へい死率につきましては先ほど言ったとおり10パーセントなれば本当に理想だなという部分ありますけど、今の多段式については、これまでの状況踏まえると決してその10パーセント20パーセントで治まっている状況じゃないという分はありながら、今回、令和7年度からプール方式で試験させていただいたと、そういう方のへい死率が15パーセント程度になっておりまして、そこを目指して我々もいけばいいなと思いますし、15パーセントのへい死はどう見たかという、やっぱり今までしっかりやっている北日本水産が長年培ったノウハウ経験をもとに15パーセントぐらいの値を見出したということで我々もその話を伺って納得している次第でございます。

○委員長（佐藤孝男）

平沼委員。

○委員（平沼昌平）

それで今までブランドを陸上アワビはブランド化して福島町もブランド化してきていますよね。1つの町の看板になっています。その看板はアワビというものもそうですけども、画期的な施設の中で陸上アワビを養殖していると多段式のもので。それを完全にプール式に変えた時にブランドイコールその画期的な生産方法というものも併せてその珍しさもあつたやに考えるんですけども、そこら辺を完全に抹消した中で考えて行こうとしているのか、それともいくらか残してやるのかそこら辺の考え方はどうなんですかね。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

当時多段式で行ったのは特許を取った画期的なもの光熱水費も抑えられる、取水も抑えられるという分でいいことづくめという部分を謳いながら行ったんですけど、やっぱり今でいうと採算性もなかなか見出

せないという部分から基本的にはプール式に移行していきたいという部分を持って臨んでおりますが、多段式の部分についてはこれから町内部でも話はしていかなきゃないでしょうし、技術持っている山下さんともまたお話ししていく機会が町長含めあるのかなと思っております。

○委員長（佐藤孝男）

ほかに。

平野委員。

○委員（平野隆雄）

北日本方式はプールの水槽ということで、ここ2、3年そういう、去年見に行った時には水槽で、どちらかというと古い形の飼育の仕方、昔の水槽ですね。

それで、うちの水槽は今言ったように特許があって水が段々で来て行って、酸素も入るしとかというもので最初は随分我々素人ながらいい水槽なもんだなという風なことを記憶しております。

それが今ここにきて7、8年経った段階で北日本方式の方が優れていると、昔の方式の方が見た目はですよ、その方がいいんじゃないかという風に聞こえるんですね。特許持っているという風な話から、ここは何年か使ったわけですね。そして、古くなっているのもあるやに先ほど聞きましたけども結局北日本方式にプール方式に変えていくんだという風なことになったら、この多段式の方の例えば山口さんとかそういう色々な人方のお世話になってやったわけですね。そういう人方との絡みはどうか。何でいまさら何言うんだという風なことになりませんか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

当初は先程来から言っています画期的な飼育方式で生産できるという分が売りでやって、特許もあるということで行きました。そこは今これまで8年間やらせていただいたなかでは、福島町陸上養殖アワビという分が随分町内外にも浸透したのではないかとこの部分で思っています。

ただ、このままいくと以前から指摘されています赤字の解消どうするんだという部分もありますし、そこをやっぱりしっかり福島町イコール陸上養殖アワビとなったものですから、そこをしっかりと今度生産、外にも町内にも向けてしっかりと販売できる体制を取るとということでプール方式に舵を切るということで、北日本水産もやっぱり岩手県からのリスク分散で北海道福島町にも拠点をという部分にしっかりと町長も含めてそういう内容でしっかりと合意ができたもので、そういう風にプール方式で行く方向で切り替えていこうかということで今しっかりとこれで確定するんだという話ではないですけど、こういう話を前向きに協議させていただいております。

○委員長（佐藤孝男）

平野委員。

○委員（平野隆雄）

桧山の方のアワビ養殖の関係は、この多段式ではないんですね。例えば上ノ国とかあの辺はプール方式の水槽を使っていますよね。だから、そういう方のデータとかそういう風なものは取っていますか。

それとも、やはり、病気が出た時には同じような病気で全滅したと、全滅に近い段階のものがあったという風なことなのかどうか、その辺をお聞かせください。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

近くで言うと桧山の上ノ国町が私達と同じような感じで公社から購入して生産しているんですけど、方式はやっぱりプール方式、多段式というのは福島町のみなので、あとはみんなプール方式です。

多段とプールとの比較の違いもあるんですけど、水槽だけの比較じゃなくてやっぱり個体がどうだったんだという検証も必要かなという思いがありまして、上ノ国町さんとはデータの共有、どんな感じでへい死率ありますかという共有はデータとしてお互いの町のデータを共有させてもらっています。

○委員長（佐藤孝男）

平野委員。

○委員（平野隆雄）

今ここに来て北日本さんのものは成長も良いという風なことからして、道の方から栽培公社さんのものはいつ入ったかは分かりませんが、今年入ったのか去年入ったのか分かりませんがそれを比べた場合に、うちの場合は比べるにいいわけですね。北日本のものと栽培公社のものと2種類あるわけですから、それを成長とかそういう色々なものの状況はどうなんですか。北日本さんの方が全てクリアできて大丈夫だと、よろしいという風な結果になっているのかどうなのか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

今の質問はまさしく6ページの中段以降に書いてある囲みの表がその内容となっておりまして、プール方式と多段方式で同じものについて試験調査を行ったと。その結果では、やっぱりどっちも成長はしたものの殻長では3.8ミリ公社の種苗よりは北日本の種苗の方が成長が良かったという部分と、体重・重量についても平均ですけど3.3グラム北日本さんの方が成長が良かったと。

ただ、どういうわけかこの体重は多いんですけど肥満度については平均ですからあれでしょうけど、逆に多段式の方が若干だけ肥満度はあったという結果となっております。

○委員長（佐藤孝男）

平野委員。

○委員（平野隆雄）

最後にしますけども、ただ、北日本さんの方が成長度から全てとは言いませんが良さそうだと今の段階では。そうなった時にですね、このプール方式の場合には例えば餌の量が多くなるとかそのためにその成長度が良いんだという風な状況にはなりません。

○委員長（佐藤孝男）

尾崎司由産業課水産係長。

○産業課水産係長（尾崎司由）

まずは今回の比較試験の結果によるとですね、餌を与えている量はアワビの生態に基づいて多段式水槽と5メーター水槽で調整をしていますので、餌のやり方の違いによる結果は出てくると考えられますが、それを差し引いたとしても多段式よりもプール式の方が優れているという結果だと考えております。

○委員長（佐藤孝男）

ほかに。

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

何点かお伺いします。最初にですね福原課長の説明の中で3ページの（1）現在のアワビ生産状況の部分で飼育総数を78,080と言っているんですよ。この書いてある数値は75,080ではなくて78,080なのか、その確認をまずします。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

すみません、正しくは75,080が正解です。

訂正いたします。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

この同じ3ページの（1）の部分で、北日本水産の輸送したへい死の分この分はあとで補填するというのですが、次の4ページに8年度の部分としては12月に納品の云々って書いていますが、この際に同じようにその分も一緒に入ることなんですか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

令和6年度のへい死した部分については、まず第一優先としてしっかり納品していただくというのが第

一かなと思っております。それで、納品した以外にも我々が既存の予算の中で購入できる部分もあるやに伺っております。順調に回復しているという話から12月にも予算の範囲内でもって購入できるものと思っております。

ただ、資料にも書いたとおり、公社さんのアワビも順調に育っているし、公社は北海道の浜のためにつくっている種苗でもありますので、そこは併用しながら購入していく予定でおります。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

ですから、12月に一緒に入るのかどうなのか。いつ入るのかということを聞いています。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

書かせてもらったんですが現時点では未定ということで、ただ、北日本水産の社長と専務と話しするなかでは12月までにははっきりまずはへい死した分の補填、そのあとに供給できる契約できる個数があればそこで別途契約ということで一応12月を目途に双方別々ですけど、まずはへい死の分。その次に我々が購入するというのは2段階で入ってくる予定です。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

4ページの（3）の表の部分ですね。活販売の部分の商用の部分、これは主に五島軒の関係が多いんだという風に思うのですが、数量を見ると令和3年の22,758からどんどん減っている状況。背景は色々あるんだと思うのですが、五島軒のアワビカレーの部分の販売状況含めて数字が下がっている要因というのは、なかなか当初のような状況ではなくて減少しているという風な見方でいいですか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

五島軒のアワビにつきましては、令和7年度では2回の製作ということでまちづくり工房に購入していただいています。ただ、供給できる個数がやっぱり少ないという部分で、工房さんにおいてはまだまだ生産したいという部分もあるんでしょうけど、福島町から提供できる限界という部分を想定して2回のアワビカレーの生産になっている状況でございます。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

聞いているのは、その背景的なものは色々あるんでしょうけど、五島軒のアワビカレーの売上そのものがこちらの生産体制が整えないから対応できないんだと。売上は順調に今までどおりということなんですかということを聞いているんです。この数字が全然下がっているわけですね。ですから、アワビカレーの売上の状況を聞いているんです。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

アワビカレーの売上が今いくらか、何個でいくらかという部分はこの場で資料もないですしお答えすることができませんけど、アワビカレーの需要が低くなったというわけじゃなくて、しっかり作れば購入していただける方もおりますので、我々の供給がなかなか叶わなかったということが大きな要因となっております。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

次の6ページの部分の（2）試験飼育の関係ですけども、プール式と多段式の比較で重量と肥満度が違

っているんですけども、この「肥満度」という捉え方というのは厚さということなのか、幅ではなくて厚さということなのか、この肥満度の内容を教えてください。

○委員長（佐藤孝男）

尾崎産業課水産係長。

○産業課水産係長（尾崎司宙）

ここでの肥満度につきましては、いわゆる殻長に対してどれだけ重量があるかになりまして、最初に入れた段階からどの程度殻長と重量が伸びたかを出したうえで、どこまで身が大きくなったか、いわゆるどの程度太ったかを表す指標になっております。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

前回の常任委員会の最後ですね、方向的には今のプール方式にという方向でということなんですけども、1つ問題は今の多段式の方式をやる設備で、そこに向けた補助金含めて対応したわけですよ。それを止めるとすれば、今、前段の質疑のやり取りの部分でも全面的に今のプール方式に転換という北日本水産の方式に変えるという方向性であれば、今の施設を全部改修するということになるんだという風に思うんですね。それで、補助の対応を含めてどう対応するのか。

それと、前段の各委員からの質問の中にもあるように、これも私は前回の委員会の時も話したんですが、多段式を対応した方、特許を取った部分とかそれを中心に指導した対応の部分に現時点では何か課長の説明ではまだ説明していないということなんですけども、前回の委員会でもそれが当然対応しなきゃいけないことだろうということで私は質疑の中で対応したという風に思うんですけども、現時点でも対応していないということはちょっとどうなのかなと思うのですが、その部分で状況をもう一回確認します。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

まず1点目の施設の改修の部分については、議長おっしゃるとおり、当時、国の地方創生の拠点整備交付金で整備させてもらっています。それで、国の補助入っていますので自分の方も凄く心配になったものですから、プール方式に変える場合の手法ってどうなんですかという部分は北海道にも照会してあります。

それと、つけ加えて言わせてもらったのが、鉄筋とか使用しているものもありますし、だんだん老朽化していると。これが大蔵省令の耐用年数の部分の年数にも超えているんじゃないかと。これはしっかり改修する時には新しい方式でやってもいいですかという確認をしたところ、そこが耐用年数クリアしているので補助金の観点からもそこは否定するものではないという部分で指導を受けております。

それと、2つ目のこれまでの水産アドバイザーの方への接触ですが、今現時点ではできていませんけど、調査事業も2年目としてやっていますので、しかるべきという時に説明する必要があるんだということで考えております。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

7ページの表の部分で、これは委託になるわけなんですけども、スタートの段階で議会とも話をして、本当は町側の考えも漁業組合中心に対応、将来は試験的なものは町の方が中心になってやって、ある程度軌道に乗った場合には漁業組合で考えてくればということなんですけども、なかなか漁業組合の方は全く無理だっていますかその意思がないというような感じで経過来たんだと思うんです。

これを北日本の方に委託するということの部分になると、当初の町が考えた想定とこれで十分大丈夫なのかということと、それから、行政としてのメリットというのはどうなるのか。この資料を見ても人件費の関係も状況では今まで3人使ったものが1人になるという人件費の関係含めて町へのメリットという部分がどうなのかということで少し疑問を持つわけなんですけど、その辺をどう捉えていくのか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

1点目の漁協の部分については、これまでも再三に漁協の方とも協議したんですけど、採算なかなか確保できないという部分から漁協では受けることができないよという分は幾度となく言われているところがございます。

それと、漁協当初想定したという部分で、漁協に事業を移管してという部分でしょうけど、そこが叶わなくてもしっかり北日本水産がアワビの生産をしっかりとさせていただいたうえで、天然貝においても種苗放流することも可能となりますので、北日本さんの関わりとしてしっかり漁協とも絡んで、まちの理解を漁業者の理解を得られるように種苗の供給なども漁協に行っていければなという部分でそこは継続して考えるものとなっております。

あとは行政のメリットとすると、やっぱりコストを抑えることができるという部分が最大のメリットかなと。アワビの生産は継続しつつ、しっかり福島町「アワビ」だという部分を北日本さんに移して対応できることができるという部分がメリットと考えています。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

現況では生育したアワビの販売というのは、例えば五島軒の対応も含めて福島工房を通して対応するという方式でやっているんだと思うのですが、これが北日本に行った場合においては、北日本の指導でその辺も含めて変わってくるのか、その辺を懸念しますよね。

ですから、今、当然その町が対応していたそういうものについては、当然、引き続き福島工房の対応で窓口として対応するという方式で考えていくのか、その辺は北日本さんの方とどういう話になっているのか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

アワビカレーの供給につきましては、今の時点では北日本水産とはそのような話はしていませんけども、これまで長くアワビカレー人気商品として取り扱われた内容ともなりますので、そこは福島町の思いとして優先的にアワビカレーの供給というものはやっていかなければいけないでしょうし、北日本さんとするとは自分達のノウハウでもって大口の販売拠点とかもあるでしょうからそこら辺にもらんでいるとは思いますが、まずはうちの町とすると「アワビカレー」を優先に供給していただきたいという分はこれからお話して行きたいなと思っています。

○委員長（佐藤孝男）

ほかに委員外議員ありませんか。

藤山委員外議員。

○委員外議員（藤山大）

何点かあるんですが、とりあえず3ページの部分で、輸送・飼育時へい死という部分で北日本水産での輸送でのストレスによるへい死の数、この数が分かるのであれば、要は輸送時の死亡そこだけお聞きしたいと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

このへい死の部分は38,917と書いていますけども、まず2点が要素としてありまして、1点が夏場という部分で元気がなくなる場面での輸送だったと。それが冷房車で来てますけど、冷房のかけ具合とかもあるんでしょうし、例えば外側の箱積みしてますけど外側は例えばしっかり冷房効いている。ただ、中の方まで行き渡ってなかったという分も要因の1つの可能性もあるし、また、あとはペーパーにも書いたんですけど、当時の北日本というか岩手の海洋環境の部分もあって岩手の方でも相当へい死したという分、元気がなかったという話も聞いていますので、そこら辺が双方相まって大量へい死に繋がったと。

これは福島町の取り扱いが悪かったとか多段式が悪かったとかということじゃなくて、北日本水産が私どもの種苗がということをしつかり言っているもので、そういう結果となりました。だからこそ、しっかりその分を補填していただけるという確約を得ております。

○委員長（佐藤孝男）

藤山委員外議員。

○委員外議員（藤山大）

その次に、先ほどのアワビの個数の部分で最大限73,000で間違いないのか確認だけすると、プール方式にする場合、ここって改装なり何かしなきゃならないですね。全部プール方式にする場合であれば。それに掛かる予算ってどこまで見込んでいるのか、分かる範囲でもしプール方式にする場合、今のやつを改装した場合の金額ある程度出ているのであれば教えていただければと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

1年間当たりの販売個数は先ほども申したとおり83,650から15パーセント差し引いて73,000個というのは想定の中でいっています。

それと、餌の例えば未利用とかの部分については、基本的なこの中の餌料費という分、例えば3年目から520万とかなっていますけど、これはしっかり人口餌料入れたものの数字であって、これがだんだん海藻昆布の間引きしたやつとかを入れることによって抑えることができるという分、そこはまだこの数字は見通せていないので、現状の餌料費として計算しています。

○委員長（佐藤孝男）

藤山委員外議員。

○委員外議員（藤山大）

僕聞いているのは、全部プール方式にした場合、プール方式の改装する分の予算をどこまで見込んでいるのかその辺何も書いていないので、その予算どれくらい掛かるのか分かる範囲で教えていただければと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

先ほども申したんですけど、4千万程度改修費に掛かるということで試算は示されておりますけど、いくらでも事業費抑制するために既存の地元で持っている水槽を活用するだとかそういう部分はこれからの整理になりますけど、今、生の数字で出ているのが4千万という数字を得ております。

○委員長（佐藤孝男）

藤山委員外議員。

○委員外議員（藤山大）

その次に、アワビの販売価格ですね。今の現状のままでいくのか、今の要は物価高騰なり色んな資材も上がっています。その変動、要は販売価格は現状どおりなのか、それとも上げていく考えはあるのか、その辺もお伺いしたいと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

そこも今後北日本さんが担った部分の中で決めて行く話にはなるとは思うんですけど、今のこの7ページの枠の3年目の収入3,066万円という部分は、全て北日本水産が設定した数字となっております。

ただ、一概に北日本さんは大手の顧客とかも持っていますし、強気と言えどもあれですけど、ある程度高い値で販売することも可能なノウハウを持っています。

ただ、町の扱いとかの分もあるので一概に全部が全部一律かという部分も、ちょっとこれから検討しなければならないなとは思っています。

○委員長（佐藤孝男）

藤山委員外議員。

○委員外議員（藤山大）

最後になりますが、施設内の部分ですね。アワビは聞くところによると夜行性であるというような話は聞きましたが、施設内の光ですね。この管理の部分、光という部分って窓はある程度あるにしても、餌を

与えている時間、その辺の光の関係ってどうされていますか。要は普段であれば真っ暗にしているとか窓の部分で黒い光の入らないような管理体制その辺今後、夜行性である分その成長率も上がると思うので、その辺どのようにされていくのか、その辺お伺いしたいと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

今の時点では施設の自然の明かりでもってやっていまして、特に細工している状況ではないですけど、今回試験で入れている5メートル水槽の部分については暑さ対策という部分もありながら、言われた黒いものの遮光ネットをかけて水温管理だとか生育管理とかをしています。

これがプール方式ほかの屋外とかで飼っている水槽とかも見ていただくと分かると思うのですが、場合によっては遮光ネット張ったりだとかそういうのもしていますので、今後新たなものがあれば新たな全部プール方式とかになるのであれば、そういう分も必要になってくるのかなと思っています。

○委員長（佐藤孝男）

いいですか。

ほかに。

木村委員外議員。

○委員外議員（木村隆）

6ページ中段の試験飼育について伺います。昨年の委員会の資料を見ますと、令和7年の8月6日に北日本さんから4,000個試験種苗ということで始めました。1年経ってこの結果ということなんですけども、何ミリの種苗を試験スタートしたのか。こっちも去年の資料も書かれていないんですけども、それをまず伺います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

平均30ミリでございます。

○委員長（佐藤孝男）

木村委員外議員。

○委員外議員（木村隆）

それですね、その下段に70ミリサイズになると販売の一定基準だということなんですけども、じゃあどれぐらいの年月で70ミリサイズになるという風に見込まれているのか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

種苗が平均30ミリと仮定した中にはなりますけど、1年半で70ミリ以上の出荷サイズとなるものでございます。

○委員長（佐藤孝男）

いいですか。

熊野委員外議員。

○委員外議員（熊野茂夫）

大体色々出てきたと思うのですが2点お伺いいたします。

1つは取水の関係です。これは環境そのものが非常に生きているものですから大きな影響を与えるだろうという観点で、この取水の関係、水質の問題も含めて、どの程度どう考えているのかお願いいたします。

○委員長（佐藤孝男）

中村産業課長補佐。

○産業課長補佐（中村伸也）

取水の関係につきましては、今、昨年度からやっている調査の中で、こちらにも言葉として書かせてもらっているんですけども水質サンプル調査でボーリングということで、ボーリングと言いましても5メートル程度掘ったところで海水の地下水ではなくて浸透水の方を使うような形で検討しております。

これは北日本水産さんも岩手県の方でやっている手法となっておりまして、そういう風にすると、外界の水温より1から2度低くなるですとか、あとは浸透することによって自然のろ過という風なこともありますので、それで水質が良くなるということでこちらのポーリングというか浸透水ということで今検討しているところでございます。

○委員長（佐藤孝男）

熊野委員外議員。

○委員外議員（熊野茂夫）

次にですね、これは繁殖なんで、地元でここでもって繁殖して、それから稚仔を得ていくという方向性は検討されているんですか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

そこが最後の企業誘致という観点にはなるんですけど、陸上養殖は今既存の施設で行いますけど、先ほどもちらっと言いました岩手県とのリスク分散で北海道にも拠点を構えるという部分が北日本水産の社長の思いでもありますので、そこは別の事業として北日本水産が新たに建てるんだっていう意気込みも持っています。そこで、北日本水産が親から北海道福島町の親から採卵したものをしっかり種苗として成長させて販売用まで持っていくというそういうストーリーも描いているような内容で協議させてもらっていますので、一番いいパターンは福島町に種苗施設が建つんだという部分が最高の結果かなと思っています。

○委員長（佐藤孝男）

熊野委員外議員。

○委員外議員（熊野茂夫）

これは稚仔の生産ということから考えると、現実には自然環境の中には福島町の中で親がいるわけですね。ということは、そこから稚仔を親を採って、それから稚仔を採っていくというこういう考えをしているという考え方でいいですか、基本は。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

もう一度整理しますけど、今のアワビ陸上養殖施設の中での種苗はしっかり北日本さんと栽培公社から購入させていただく。その別枠として新たに種苗センターを建ててくれるのであれば、地元の親から採卵して、しっかり地元内と道内に向ける種苗を作っていただくというのが狙いとなっています。

○委員長（佐藤孝男）

熊野委員外議員。

○委員外議員（熊野茂夫）

次に、購入された稚仔の関係ですが、その代金が令和6年で600万余り、7年で380万、令和8年で495万という風にして大体数字が上がっているんですが、そうすると、へい死率15で先ほど課長の方で大体年間の8万のうち7万ぐらいを販売していくんだという考え方。ここの数字の誤差というのがきちんと計画上でもって、今のところからデータとして出ているんですか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

データの的には福島町の今の施設の中のデータではなくて、北日本さんがやっているデータという部分を元にやっていますので、だからこそ令和7年8年として飼育試験やっている分をしっかりと結果を踏まえながら修正していくというのが一番なのかなと思っています。

○委員長（佐藤孝男）

いいですか。

それでは質疑を終わります。

暫時休憩いたします。

(休憩 11時07分)

(再開 11時20分)

○委員長（佐藤孝男）

休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

質疑ありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（佐藤孝男）

質疑なしと認め、質疑を終わります。

次に、説明員との意見交換を行います。

小鹿委員。

○委員（小鹿昭義）

課長1つ聞きたいんですけど、加工販売って考えたことありますか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

加工につきましては、活のものを冷凍するという加工という認識はありますが、それ以外の販売は考えていません。

○委員長（佐藤孝男）

小鹿委員。

○委員（小鹿昭義）

例えば道水さんとか竹田食品とか布目水産に持って行って、そういう加工をして販売する。要はそういう食品会社はスーパーとかに卸していますので、そういうことを考えたことないですかね。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

そういう企業さんとの関わりとかも考えなかったわけではないんですけど、やっぱり全体数の供給数が不足するもので、やっぱりそういう加工屋さんとか商売する方々に向けるには、やっぱり個数が絶対的に不足するということで、その中でうちは断念しているという状況です。

○委員長（佐藤孝男）

ほかに。

平沼委員。

○委員（平沼昌平）

このアワビ陸上養殖施設これ自体を町が何を守って、この施設を守りながら何を変えていくかということ考えた時に、やはり、町が福島町が守るべき価値と、それからそれを町が担う必要性がないものという風に区分した時に、やはりその生育施設自体は私は民間業者に委託した方がいいのかなと。このアワビ陸上養殖施設に関してはですね。その民間業者が新たに自分の会社を立ち上げるというならこれは話はまた別ですよ。でも、今福島町が今まで10年間築き上げてきた試行錯誤しながら続けてきたものが、やはりより効率的に進めていくためには、町が守るべきものと、町が委託するべきもの、負わなくてもいい責任、ここら辺を完全に区分して私は進めた方がいいと思うんです。

ただ、町はやはり何といても陸上養殖施設という地域ブランドこれを守っていかなければならないし、それから、今ちょっと出ましたけども地域の経済効果ですよね。加工業者加工するなり、あとアワビカレーとかって町内の飲食店に出すなりとか、何と言ってもやっぱり陸上養殖アワビという町のその今まで築いた10年間とはいえ築いた、それから知名度のある町の誇りですよね。誇りというか考え方というか進め方、これは大事にしていかなきゃなんないと思うんです。

その中で、やはり、平成28年、2016年から試験的にやった多段式のその多段式の養殖施設に至るまで、私も横でさまざま見させていただいてますけども、かなり試行錯誤しながら今の状況になったと。

これはもう陸上養殖アワビ施設の福島町の1つの歴史の始まりだと思うんですね。だから、やはりそういうのをきちんと生産性は上がらないかもしれませんが、上がらないというわけじゃないんですよ。人件費が掛かりすぎるんですよ。ですから、それが悪いとか良いとかじゃなくて固定費が掛かり過ぎるのでそれを今変えようかというところなんですけども、そこまで来た段階での施設を全くプール式に全部変えてしまうんだと、ちょっと今までの流れからいくと血も涙もない話なのかなって私は町長感じるんですよ。町長はどう感じるのかは分かりませんがね。だから、そこら辺はやっぱりちょっと残していくのと、あと、公設民営という形にするとやはり安全性とかそういう衛生面とかというのは、町がやっぱりきちんと管理していくということを町が守るべきその立ち位置を守った中で、民間と協議していった方がベターかなとこのように考えるんです。この資料を見させていただいて。

何と言っても生産現場の人件費を抑制することができるし、かえって数量的なものも確保できるということになれば、諸手を挙げて第三者ということにもならないでしょうけども、町の担うべき責任分担というのはいくらか軽減されて、なおかつブランドは守れるという風なことで進めていくべきなのかなとは思っています。是非お考えを伺いたいと思います。お考えを伺う前に、多段式の在り方というものも是非お聞かせ願いたいと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

これまで、まだこれからあるんですけど、多段式の部分につきましては、今の私の説明では全部施設内を改修すると56本水槽が入るという話ではあるんですけど、議員も多分施設行ってお承知のとおり、入ってすぐ右手の方が北大さん・未来大学さんとの連携している事業の中で調査しているところもあるので、あそこは多段式であるからこそ調査しているという認識なものですから、その部分はやっぱりもしかすると多段式を残した感じで、1列の部分は多段式を残した感じで当面行く必要があるんだなという分で見ているし、これが大学の分がなくなったからじゃあどうするんだっていう部分は先の議論にはなると思うんですけど、当面はその大学との連携もあるのでそこら辺はしっかり対応していきたいと思っています。

○委員長（佐藤孝男）

鳴海町長。

○町長（鳴海清春）

アワビ陸上養殖については前もお話しましたが、私町長就任した時に道庁のロビーで山内さんと熱く語ってですね、福島に何か特産品を作りたいんだということで、我々も水産を担当したものとしてこのアワビというのがなかなか難しいというのが分かっていたので、そこに少し手を染めようということではアドバイザーに来てもらいました。

そういったなかで今山内さんは5年、6年ぐらいしっかり色んな試行錯誤をして、私も山内さんが書いた報告書持っていますけども、その中かなり失敗を連続する、要は失敗することによって成功があるんだということを書き綴って、今のその多段式。ただ、山内さんも頭の中には多段式じゃあ大量までやる方がいいのかどうかというところを少し噛み砕いて書いていて、将来的にはですね、まとめの中で書いている言葉の中に漁業者が反対に個別にやる施設として展開できないかということを書いてくれているんですね。それは要するに、キロというか大体300円からのところを2万個育てると600万ぐらいの生産になるので、大体600万から1千万の、今でいうところの昆布みたいなものですね。要するに今、昆布が順調なので誰もそういった思いを持つ方がいないかもしれませんが、将来的に万が一昆布が高水温になって福島で採れなくなるとか色んなことがまたあるんだと思います。

副次的に例えばその漁業者が新たな取り組みとしてそういったものに展開できるようなものを、私は山内さんが残してくれたのがこの財産でいいんじゃないかなと。要するに、そこをなくすとかどうするかという議論よりは、山内さんもより今アワビの展開が前に進むことを多分望んでいるんだと思いますのでそういったことも考えながら、あと皆さんからいただいているように、やっぱり自分も山内さんと熱く語った以上、しっかりちゃんと報告だけはしなきゃいけないと思っていますので、ただ、なかなか今会えていないのが状況というか、私もちょっと忙しいのもありますのでなかなかその辺、また、我々もしっかり方向性を今定めたわけではありませぬので、今まさに今日のように議会で議論いただきながら、ちょっと方向

性を変えようという形で今進めていますので、その辺の結果がしっかりと私達の方向性の段階では、当然やっぱり仁義を切っておくべきだなという風に私は思っていますので、ただ、私は山内さん取りも直さず当初は中塚建設の社長とタッグを組んでやったところがスタートでありますので、そういった方々の思いもこの施設には含まれていますので、私はその施設の概要なりしっかりと結構厚い報告書として私いただいていますので、そういったものとして財産として私は残っていますのでいつでも活用できるようになりますし、また、先ほど言いましたとおり、山内さんはそれが漁業者の所得につながるようなことを望んでいたという風に私は思っていますので、そういったことがまた可能であればこの財産を漁業に還元するようなことも進めていければと思っていますので、そういったなかでまず鋭意しっかり今のものを前に進めるようなことをこれから真剣にまた新たな企業と取り組んでいければという風に思っています。

○委員長（佐藤孝男）

いいですか。

ほかに。

平野委員。

○委員（平野隆雄）

先ほど質疑で求めましたけど、いわゆる、やや10年近くこの方式でやってきたわけですね。昔から私の小さい頃からいいものは1年か3年である程度方向性が出るという話をよく聞いたものです。それが10年経ってもこういう状態だよってということと、それと今、先ほど町長が言いましたけども、この方向性は方向性としてこの多段式それからプール方式その辺を相手があることですから、北日本さん色々な話をしてこれから先福島町はどうしたらいいかという風な話を議論して、いい方向に持って行ったらいいかなという風に思っております。

○委員長（佐藤孝男）

鳴海町長。

○町長（鳴海清春）

ありがとうございます。今ある程度6年ぐらい経過してなかなか難しい。ただ、我々想定したような当初は7万4千で2年で14万の施設をある程度作れば大体ある程度年間3、4千万ぐらいの生産が上がって収入がペイできるだろうという想定で国の補助金をいただきながら施設展開しました。

ただ、やはり生き物というのは難しい。過去にヒラメでもだいぶ私水産担当した時にうちの指導員が難儀したのを見てますけども、やはり我々が想定していないようなことが自然界では発生するわけですね。今回もまさか栽培公社の方であそこまで筋萎縮症が出るということは想定しませんでした。

ただ、やはりどちらかというところアワビはこれまでも完全養殖ということにあまり力を置いていないんですよ。はっきり言うと北海道も含めて、あくまでも中間育成しているのも色々な形で天然海に種苗放流して自然界の資源を増やすことに力を注いでいるということで、なかなか我々の方は先ほど課長が言いましたとおり、だから一番最後に来る場所なんですね。

ある程度ほかの所で使って余剰を我々の方にいただくという形で、だから種苗自体もそんなにじゃあ強いものかというとなかなか濃淡があるということで厳しい中にありますので、そういった中でも我々今山内さんの技術をいただきながら、しっかり養殖を展開しました。なかなか厳しい状況ではありますけども、ただ育てればそれなりに生産に結び付くということは分かってきましたし、また、1つ福島の特産としてアワビカレーというものが1つ私はこれ出来ただけでも大きな財産ではないのかなと。

今までなかなか我々の同級生でも例えば都会に出てあれした時に、福島に帰っても何も食べるものないんだよねっていう言葉をいただいたのが、今はトンビパスタだったりアワビカレーとかそういった形で今ある程度帰ってくれば食べれるものが出来た。私はそれ1つだけでも相当な財産ではないのかなと。

これはなかなか先ほど言いましたとおり収支の中で計りすることはできませんけども、ただ、なかなかそのところを踏まえて町の振興ということには1つ町としてやった意義があるのではないのかなと。

ただ、なかなかそれを継続するにはやはり、いくら町の事業といっても収支が赤字状態で続くわけにはいきませんのでそこはしっかりやっていきたいと思いますし、また、先ほどこれを組合に預けるといっても組合も当然今これまで、今年はちょっと昨年昆布が良かったので一息ついていますが体力ありませんので、自前で事業を展開するほど今組合に体力があるかといえませんがありませんので、そのところは我々また引き続きしっかり支援はしていきたいと思っておりますけども、そういったなかで一定程度の成果には繋が

っているのではないのかなと思ってございますので、ただ、それに甘えることなく次の展開をしっかり見据えて、今せっかく岩手県でアワビ養殖を生業としている業者がおりますので、そここのところに福島町の方に入って来ていただいて、何とか企業誘致という形にはなろうかと思えますけども、我々の福島でまた蝦夷アワビを生産していただく拠点を作っていただければ、また新たな展開に繋がっていくんでないかなと思っていますので、多少また予算を皆さんにお願いすることになりますので、そういった方向性がしっかり固まった段階でまた今日のような形でお諮りしながら町民の方々の理解をいただければという風に思っているところであります。

○委員長（佐藤孝男）

ほかに。

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

今の町長の答弁で、この後また整理して対応するというでいいんだという風に思います。

もう一つ担当の方に聞きますけども、プール方式と多段式でやった場合の今の陸上養殖の特徴というのは天然のものよりも柔らかいというのが特徴なわけですね。その多段式とプールの場合のアワビの柔らかさの加減というのはどうなんですか。それは変わらないということでもいいですか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

天然貝の活きのいいものからすると、やっぱり養殖で育っているものなので若干柔らかめに推移するというのが言われています。

○委員長（佐藤孝男）

溝部議長。

○委員（溝部幸基）

私は柔らかいのが悪いということではなくて、逆に柔らかいのがいいという方が陸上養殖のアワビの普及といいますか、その評判を良くしているんでないかなという風に思うので、それはどんどんこれからもアピールして対応して、またいい点になるんじゃないかなと思います。

それで、色々今日話が出ましたし、これは常任委員会としては去年の8月22日にやっているんですよ。それから1年経過している状況の中で色々その段階で指摘した問題は、現況の多段式の対応している方に当然今までの議論のとおり大変苦労していただいたし、その成果も色んな形で私は大きな成果があったんだという風に思うんですよ。それを転換するわけですから、その方達への配慮というのは私は1年間経っても確かに町長忙しいのは分かりますけども、それはそれとしても、ここまで前回の去年の段階でも既にその方向性で検討するということになっていますし、今回については完全に9年度から3年間の計画を立ててというところまで来ているわけですから、そこを早く対応するということも含めて、きちっと対応することをお願いしたいという風に思いますし、今、町長の方からもある程度整理した段階では、もう一回その常任委員会の方ということなんですけども、後段の部分でも来年の9年度から3カ年で計画を進めるということですから、それに向けて当然今年度の段階で方向性含めてはっきり、今日出たようなテーマの部分も含めて整理をして議会の方に資料を示してやるようにしていただきたいと思いますが、その9年度からの3カ年の計画に向けての対応含めて、これで最後にしますので町長の方から話をいただければと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

今後のところの9年度からの3カ年という部分は、あくまでも北日本水産とこういう風に進めればいいねという話で進んでいます。

それで先ほど申したんですけど、今年度も試験事業やっていますのでその結果を踏まえて、じゃあ本来に来年度から行けるというこれまでやってきたアドバイザーの方にもしっかりお話を通した上で、9年度から進めるかという部分はしっかり調整したうえで、もしこれが9年度から行けるのであれば、しっかりその方向性という部分は議会にお示しして、予算も絡むわけですから当初予算から動いていかなきゃない

と思う案件になりますので、そうなればまた常任委員会で報告させていただければと思います。

○委員長（佐藤孝男）

鳴海町長。

○町長（鳴海清春）

課長の報告がありましたとおり、我々としては新年度予算からまた新たな展開についての予算をお願いすることになりますので、そのスケジュールからいくと大体12月くらいから詰め始めますので、そして2月3月の議会ということになりますので、当然その常任委員会含めて方向性が我々としてガチッと資料として出せるというタイミングを見計らって、我々も山内さんなり中塚建設さんの方も含めて、1回そういう場を設けてしっかり説明はしていきたいと思います。変な誤解のないように我々としてはしっかりいただいた財産は守っていきますということはお話はしていきたいと思います。

○委員長（佐藤孝男）

ほかに。

藤山委員外議員。

○委員外議員（藤山大）

質疑の段階で何点かお伺いしたなかで少し気になる点だけ僕の方がするのは、アワビの価格ですね。

今までやっぱり物価高騰・資材なり人件費も上がっていると。僕的な提案です。提案でいきます。町内の部分に関しては現状維持でいいと思うんですけど、町外ですね。今色んな食べ物でもそうですけども他の所で外国人向けで同じものであっても例えばですけど日本人が食べるものラーメン千円であるのが外国人に向けて2千円で売ったりというような販売もしているところもあります。という部分で町内のことを考えているのであれば金額設定はそのままがいいと思うのですが、町外に向けての金額のアップの検討、提案ですけどその辺考えてもらえればなと思うのですが、いかがでしょうか。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

外国人がどうのこうのという話もなく、しっかり価格の差はつけていくというか、しっかり今度は町がやるのではなくて民間にお願いするのであれば、しっかり稼ぐ部分というのもしっかり出てくるだろうし、一方で町の中でアワビカレーが浸透したという実績もあります。ここが価格が高騰になることによって、アワビカレーが消えていくというのものなかなか寂しいものがありますので、しっかり、まちというか私達町側と北日本さんとか関係あるところと単価の決め、この7ページの収入の売上の積算は本当に町外向けの強気な設定になっているんですけど、そこだけじゃなくて、町の単価という部分もあっていいのかという部分は今後議論していきたいなと思っています。

○委員長（佐藤孝男）

藤山委員外議員。

○委員外議員（藤山大）

先ほどプール方式に例えば全部する場合56基という部分で4千万掛かるという部分で、本来であれば町である程度予算出さないで民間の業者がやってもらえれば一番これはベスト。そこで収支がうまいこといくのであれば、本当に民間業者に全部委託していくのがいいと思うんですよ。でも、僕ちょっと懸念する部分1つだけあるんですよ。前回の委員会でやったブルーベリーの件で、言葉が適切かどうかは分からないです。ある程度行った段階で見捨てるような真似、見捨てるというか切るといふ真似はある程度したくない。これが本当に北日本さんがある程度経営していく段階で順調によるのであればそのまま全部北日本さんに行けばいいと思うのですが、もし万が一どうこうってある程度の段階で目途切って見捨てるような真似だけはあんまりしてほしくないと思っているので、その辺今後の見通しとして、ちゃんと町としてある程度うまくいくまでは見ていくという方向で考えているのか、その辺だけ教えていただければと思います。

○委員長（佐藤孝男）

福原産業課長。

○産業課長（福原貴之）

水槽の改修の件につきましても4千万という話もお話させてもらったんですけど、やっぱりしっかり町

があるべき姿「プール方式で行きますよ」「プールで出来ましたのでやってください」という中でないと北日本さんをお願いできないという分は思っています。それは私どももそうですし北日本さんだって改修後にだったら引き受けますよという話になってくると思うので、そこはそういう調整というか協議してまいりたいなという部分で、決して双方で見捨てるという話にはならないと思うし、北日本さんもそれなりの収支、民間事業者なので企業なのでしっかり収支バランスとかも考えたうえでの福島町の施設を受けるだとか、あとは別の場所に種苗センターを建てるだとかそういう部分は商機はあると踏んでやっていると思いますので、そこは町としても足並みを揃えてやっていくべきだという分で認識しています。

○委員長（佐藤孝男）

ほかに委員外議員ありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（佐藤孝男）

以上で、調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」の質疑及び説明員との意見交換を終わります。

説明員の皆様は退席をお願いいたします。

ご苦労さまでした。

それでは、調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」の本委員会の意見の取りまとめを行います。

暫時休憩いたします。

（休憩 11時47分）

（再開 11時54分）

○委員長（佐藤孝男）

休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

休憩中の「論点・争点の整理」を基に、問題点やその対応策などの討議や意見交換を行いました。

私が今述べたようなことで、委員長に一任させていただければと思いますがいかがでしょうか。

（「異議なし」という声あり）

○委員長（佐藤孝男）

お諮りいたします。

ただいま議題となっております調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」に関する本委員会意見の取りまとめ及びその調整については、委員長に一任願いたいと思いますが、ご異議ございませんか。

（「異議なし」という声あり）

○委員長（佐藤孝男）

ご異議なしと認め、調査事件2「アワビ陸上養殖事業の進捗状況について」に関する本委員会の意見の取りまとめ及びその調整は、委員長に一任されました。

次に、（2）定例会9月会議の休会中の所管事務調査についてを議題といたします。

暫時休憩いたします。

（休憩 11時55分）

（再開 12時04分）

○委員長（佐藤孝男）

休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

それでは、定例会9月会議後の休会中の所管事務調査は、「4. 行政評価（事務事業評価）について」、「5. 所管関係施設・事業等の町内視察、執行方針の取り組み状況について」、「6. 第6次福島町総合計画の変更について」、「7. ごみ減量化対策の進捗状況について」、「8. クマ対策の取り組み状況について」、「9. 山間部からの流水用集水桝の管理状況について」、「その他所管に関する事項について」

とし、令和8年度定例会9月会議に休会中の所管事務調査事件として申し出をいたしたいと思いますが、ご異議ございませんか。

（「異議なし」という声あり）

○委員長（佐藤孝男）

ご異議なしと認め、ただいまお諮りした内容で、令和8年度定例会9月会議に休会中の所管事務調査事件として申し出をすることに決定いたしました。

次に、（3）の報告事項についてを議題といたします。

暫時休憩いたします。

（休憩 12時06分）

（再開 12時10分）

○委員長（佐藤孝男）

休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

最後に、3の「その他」について、何かございませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（佐藤孝男）

ないようですので、以上で、本日の案件の調査はすべて終了いたしました。

これをもちまして、経済福祉常任委員会を閉会いたします。

どうも、ご苦労さまでした。

（閉会 12時10分）

福島町議会会議条例第157条の規定により署名する。

経済福祉常任委員会委員長 佐藤孝男